そして、もうひとつ。松平千秋先生は、さる六月二十一日、ご他界された。享年九十。松平先生が、さまざまなご著作・訳業を通して、日本列島に暮らす人びとにあたえつづけてこられたものは、はかりしれない。人間、人生、あるいは世界というものに思いをいたすとき、かけがえのない「心の窓」をわたくしたちに開いてくださった。忘れようもない贈物である。まことに見事な学者人生というほかはない。

日本文化と世界文化のダブル・スタンダードを身におきつつ、人類文化の普遍性と多様性を居ながらに味わいゆく扉として、松平訳による一連の古典作品をおすすめしたい。松平先生への追悼と心よりの敬意をこめて。

（すぎやま　まさあき）

近代の記録
―「京セラ文庫『英国議会資料』」の開設にむけて―

京都大学地域研究統合情報センター教授　**押川 文子**

この３月末、附属図書館脇の駐車場に連日トラックが横付けされ、夥しい量のダンボール箱が図書館に搬入された。箱の中身は19世紀初頭から20世紀後半にいたるイギリス議会資料（British Parliamentary Papers）。慎重に荷解きされた１万２千冊余の資料は、附属図書館Ｂ2層に新設された恒温設備をもつ「京セラ文庫室」およびＢ下層の書架に収納され、この秋には京都大学「京セラ文庫『英国議会資料』」として公開される予定である。

イギリス議会資料は、イギリス議会上下院に提出された法案、諸委員会報告書、各省庁や領事などさまざまな政府機関からの報告書、センサスや通商統計など多種多様な資料を集成したもので、議会の会期ごとにまとめられている。今回、京都大学に移管されたイギリス議会資料は、イギリス商務省が保管してきたほぼ完全な資料集成であり、下院文書は1801年から1986年、上院文書は1801年から1920年までをカバーしている。1998年に京セラ株式会社から国立民族学博物館地域研究企画交流センター（当時）に寄贈され、本年春の同センターの組織再編にともない、人間文化研究機構から京都大学に移管された。もともと商務省版は欠本率が低いことに加えて損傷もすくなく、国立民族学博物館時代に公開に要する補修もほぼ完了しており、開設すれば、すべての冊を手にとって資料として閲覧することが可能となる。

イギリス議会資料が、近代を考える一級の資料であることは、おそらく説明を要しないであろう。議会資料として本格的に整理保管されるようになったのは19世紀の初頭、それ以来、まさに世界が大きく変貌した約200年の間、毎年途絶えることなく、同時代のイギリスが議会で検討すべきと考えたすべての事柄がこの資料には蓄積されてきた。どの年でもよいのだが、たとえば1861年の下院文書を見てみよう。19世紀の半ばから後半は、イギリス議会資料がもっとも充実した時期であり、1861年のセッションはおおよそ500ページほどの本69冊からなっている。法案には多種多様なものが含まれるが、なかには「死亡した妻の妹との結婚を許可する法律」といった法案もある。同じ年の委員会報告書のなかには、その2年前にインド・ベンガル地方を揺るがし、植民地土地行政のみならず「ネイティブス」の言論形成の契機ともなった、藍の強制栽培に対する農民の抵抗運動に関する特別委員会の報告書「藍騒擾に関する報告書」

が含まれている。この報告書には、インドにおける藍栽培の現状と農民の不満の要因が叙述されているだけでなく、同委員会がベンガル各地を巡回して行った農民や地主、藍加工業者などへの詳細なヒアリング記録が添付されている。私事になるが、私が初めてこの報告書を見たのは1970年代のなかばにインドに留学していたときのことだった。暑い大学図書館の隅で、一人ひとり名前をもつ農民たちが具体的に彼らの農家経営にとって藍栽培がいかに不利益なものかを陳述するのを読みながら、百余年のときを経てインドのひとつの時代が鮮明に姿を見せたような不思議な感覚にとらわれた記憶がある。そして今、この報告書が英国議会資料の一冊として並んでいるのをみると、彼らの陳述を、記録し、翻訳編集し、印刷し、議会に報告した当時のイギリスという存在、そして19世紀半ばの世界のありようにもあらためて気づかされる。この1861年の下院文書にはこのほかにも、「日本の状況」に関する江戸の公使から本国あての書簡など、イギリスの植民地支配や対外関係だけみても、実に多様な文書が含まれているのである。

資料としての議会資料の特色は、こうした同時代性、網羅性だけでなく、ひとつひとつの文書が、議会への報告を前提とした「編纂」された資料という点にもある。先に触れた「藍騒擾報告書」のような調査をまとめた報告書はもちろん、日本に関する公使書簡の背後には各地の領事からの報告がある。いわば資料の上澄み、エッセンスなのである。この特色がもっとも明確にでるのは、センサスや通商統計など、定期的に一定の形式で提出される統計類だろう。この編纂と定型化によってイギリス議会資料は、錯綜した事象の全体を、近代という長いタイムスパンで俯瞰することを可能にした。同時にこの上澄みという性格は、別の見方をすれば「何が議会に報告されなかったか」というもうひとつの隠れた問いを投げかけている。議会資料は関連する資料と組み合わせることによって、今もなお多くの発見がありうる資料なのである。

「京セラ文庫『英国議会資料』」

イギリス議会資料については、すでにアイルランド大学出版会が刊行した19世紀資料の抜粋リプリント版や各種のマイクロ・フィッシュ、タイトルなどから検索ができる検索ツール、さらに2005年からはウェブ上で全文検索と閲覧が可能なウェブ版も発売されている。とくにこのウェブ版は、膨大で網羅的な資料を自由に検索閲覧することが可能なシステムで、ここ数年で議会資料の利用はおそらくまったく新しい段階に移行し、従来では考えられなかったアプローチや分析精度の向上が見られるであろう。

しかし、こうした新しいツールだけでは、ともすると無限の可能性をもつ資料を読む側の視野で狭く切り取ることにもなりかねない。「京セラ文庫『英国議会資料』」は、附属図書館のご理解のもとに、地下書庫に配置して公開を予定している。気儘に1冊を手にとって、死んだ妻の妹と結婚する法律、ベンガル農民の苦境、「loonin（浪人）」の襲撃の噂に対応に追われる江戸の公使、こうしたことが同時に起きた近代の200年を、行きつ戻りつ逍遥してはどうだろうか。

（おしかわ　ふみこ）